



世界おもしろ文化比較

自己紹介

第1部 ラテン・アメリカでの体験・見聞から

12年間の海外生活で40カ国を訪れる



国際電話の際の当惑

“エッ 日本は地球の裏側” だって？

「赤道」クイズ・・・地球をまたぐ

「五つの『あ』の原則」

「日本に行ったら日本人だらけだった！」

世界で語られている日本人のジョーク

陽気で激しいリズムのサンバ

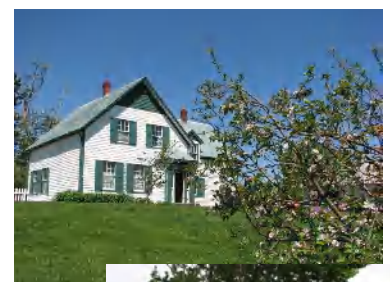
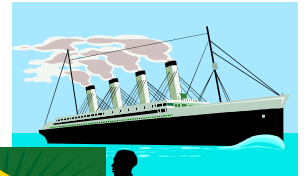
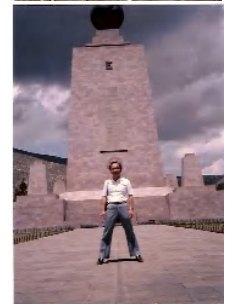
人生の哀歓がにじむタンゴ

フットボールへの熱狂ぶりと野球との対比

日本人の国際性は？



寝ている間に仕事が進む「魔法のマクラ」



第2部 定年留学、ヨーロッパ文学紀行での体験から

高校時代からの夢を実現

担当教師をファーストネームで呼ぶ

クラス仲間を我が家に招待

美人女子大生とのキスと抱擁！

観光地ではとりわけ用心を！

「カルメン」の舞台を訪ねてみたが・・・

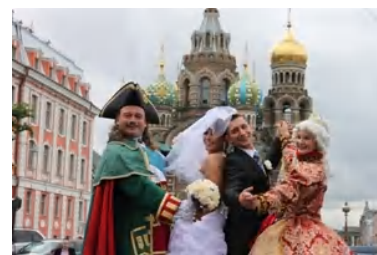
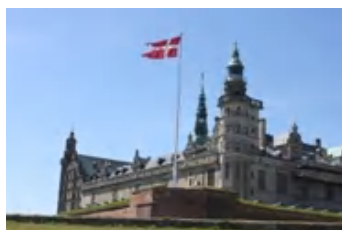
「ハポン」の姓を持つスペイン人

ワールドカップの感想あれこれ

「ああ、抱けなかったマドモアゼル！」

熟年よ大志を抱け！

定年後を輝いて生きるために



プロフィール

日本ペンクラブ会員 旅行作家 海外留学アドバイザー 英会話講師通訳 スペイン語講師通訳 シニア大衆登録講師 1941年生まれ 早稲田大学卒 マラガ大学留学
ホームページ: <http://homepage2.nifty.com/donky>

こちらにお邪魔する前に少し新座市についてインターネットで調べてまいりました。調べものといえは今は何でもネットなんですね。それによりますと：

新座市といえは印刷・製本関係の工場が多く、出版業界では「新座の印刷所に（原稿を）持っていく」と言う表現が多用されています。手塚プロダクションの第Ⅰスタジオがあり、『鉄腕アトム』のアトムは当市の特別住民に登録されている、なんてありました。その通りですか？ 夢があって面白いですね。

以下、市の木はモミジで市の花はコブシ。現在の人口が16万、市制となった1970年の人口は7万7千人といえますから45年間に倍増以上、近年の発展ぶりは凄いですよね。

そんな未来に発展しつつある新座の皆様とお話をさせていただく機会を私も楽しみにしてまいりました。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

自己紹介

最初に簡単な自己紹介をさせていただきます。

生まれは昭和16年(1941年)、ちょうど太平洋戦争が始まった年でした。5日後の17日が74歳の誕生日になります。「武」という名前は、男は武士のように強くあれ、といった親の願望だったようです。

早稲田大学を卒業後、国立にあるNHK学園高校の教諭として勤務、その後、聖教新聞社に入社し、特派員としてパナマに10年間駐在しました。この間に北南米およびヨーロッパの32カ国を訪問する機会がありました。

2001年に定年退職後、横田基地内にあるセントラル・テキサス・カレッジで学び、2002年にはスペインのマラガ大学に1年間留学しました。現在は、海外留学アドバイザーとして元の職場で、留学する学生へのアドバイスや海外から来日したSGI（創価学会インタナショナル）メンバーのアテンドをしたり、昭島市が主催するシニア向けの英会話教室の講師を務めております。

またボランティア活動として、NPO法人立川多文化共生センターで、在日外国人の支援活動と、視覚障害者（目の見えない方）が聞くCDに録音する原稿の執筆、それに地元の中学校のステップアップ教室で、授業についていけない生徒の英語を中心とした個人指導もしております。

一方、私は定年後のライフワークとして「世界文学紀行」に取り組んでおり、「名作の舞台を訪ねて」各国を訪れ、そのレポートを新聞や雑誌に寄稿しています。原稿や写真は個人のHPにも載せております。その際、ペンネームを最初に取材したセルバンテスの作品『ドン・キホーテ』にちなんで「東京のドン・キホーテ」としました。

物語の中の主人公ラ・マンチャの男ドン・キホーテは、長い槍を持ち愛馬ロシナンテに乗ってスペインの平原を放浪していました。現代の東京のドン・キホーテは、槍の代わりにカメラを肩に、馬の代わりに飛行機に乗って作品の舞台を回っている次第です。

第1部 ラテン・アメリカでの体験・見聞から

12年間の海外生活で40カ国を訪れる

前置きはこのくらいにして、さっそく本題に入っていきたいと思います。私はこれまでを通算しますと、海外にいた期間は12年間ほど。現役時代に特派員として訪れた国、また定年後に文学紀行で訪れた国を合わせるとちょうど42カ国になります。地域的には主にラテン・アメリカつまり中南米と、ヨーロッパでした。そこできょうは、これらの国で見たり体験した面白いエピソードの数々を、中南米と、ヨーロッパに分けてご紹介してみたいと思います。題して「世界おもしろ文化比較」・・・・・・・・

第1部はラテン・アメリカでの話からです。

その1

国際電話の際の挨拶言葉で当惑

I T (Information Technology=情報技術の発達) 時代に入った現在は、海外から日本に原稿を送る手段にも大変な変化が起こっています。今は、皆様の日常生活でも、文字を相手方に送るのにはF A Xやメールが当たり前になっていますが、約40年前、私がパナマに赴任した当時は、F A Xさえもまだありませんでした。体験談のように急がない原稿は航空便で、ニュース性の急ぎの原稿は、電話で送ったものでした。

書いた原稿を電話口で読み上げます。それを、本社の担当記者が、原稿が短ければそのまま書き留め、長ければテープに録音し、それを再生するわけです。そのとき、まず電話口での最初のあいさつにとまどったものでした。時差の問題です。

例えば、ブラジルで、すべての取材が終わって原稿をまとめ送るのは夜の10時頃。ところが日本では朝の10時です。(ブラジルは日本とちょうど12時間遅れの時差があります)。こちらはホテルのあまり明るくないライトのもとで「コンバンワ」。でも相手から戻ってくるあいさつは「オハヨウゴザイマス」。しかも、こちらは一日の仕事の疲れでブランデーなど寝酒の時間なのですが、相手は朝の空気を胸いっぱい吸いながら、モーニングコーヒーで一番張り切っているときなんですね。このギャップ!!

“エッ 日本は地球の裏側” だって？

そう、ブラジルといえば、こんなエピソードもありました。位置はちょうど日本の真反対にあります。これをある時、ブラジル人と話をしている「日本の真裏のブラジル」と言ってしまう、ずいぶん反撥されたことがありました。

「何言ってるんだい。ブラジルから見れば日本こそ裏側じゃないか！」と。たしかにその通りですね。円い地球から見れば、どちらが表でどちらが裏かは決められないわけです。

ちなみに、南米で見る世界地図は日本のものとかかなり違ってきます。ちょっと学校時代に習った世界地図を思い出してみてください。地図の図法によっても違いますが、もっとも一般的なメルカトル図法では、日本が地図のほぼ真ん中にあり、その左側にアジア、ヨーロッパのユーラシア大陸とアフリカ大陸、右側に太平洋をはさんで北米大陸、南米大陸が描かれています。ブラジルなどは右下の端の方にあります。

ところが、あちらの地図では、真ん中に北南米大陸が描かれています。ですから、日本の位置はというと、ずっと左上の端、日本の地図でいうイベリア半島、つまりスペインの端、世界の外れのような位置になるのです。彼らの言うことも分かるような気がしますよね。

子供のころ聞いたラジオの天気予報では「表日本は晴れが続きますが、裏日本は雪でしょう」と言っていました。皆さん、今は何と言っているかわかりますか？

そう、「表日本ではなく太平洋側、裏日本ではなく日本海側ですね」。やはりそこに住む人にとっては「裏」と呼ばれるのはあまり気持ちよくないわけです。なかには山陽地方と山陰地方についても、山陰を山光と呼んだらどうだろう、と提案する人もいます。

ま、これは固有名詞だから難しいかもしれませんが、ともあれ、来年は数多くの特派員やリポーターがオリンピックの取材にブラジルを訪れると思いますが、東京本社と電話交信する場合には、私と同じような場面に遭遇するのではないかと今から推測しているところです。

その2

「赤道」クイズ・・・地球をまたぐ

ここでクイズをしてみましょう。これは中学校の総合学習での講演の際に生徒によく聞いてみる質問です。人生経験の豊かな皆様にこんなことを聞くと失礼に当たるかもしれませんが・・・

地球儀または世界地図に描かれている「赤道」の正しい定義は次のどれでしょうか？

- ①「地球上に引かれている赤い線」
- ②「地球上の最も暑い点のつながり」
- ③「地球の横腹を一周し北半球と南半球に二分する線」
- ④「地心を通して自転軸に垂直な平面が地表に交わる大円」

<2度読み上げ、各々を解説、正否を確かめていく>

3番、4番は一応、正しいといえるでしょう。でも2番は異論が出てきてく必ずしもそうではない>、さらに1番ともなると論外ですよ。

エクアドルに行った時<実は国名の「エクアドル」とはスペイン語で「赤道」の意味なんです>、私はその「赤道標」といわれるものを訪れました。首都キト市の郊外へ車で小1時間。荒涼とした禿山のふもとのやや広い台地に、基台の各辺が約8m、高さ15mほどの、先端に向かってやや細くなっていく四角柱が立っていました。その上に直径3mほどの地球儀がのっかっています。<レジュメの写真>

四角柱の各面には、それぞれ[E][O][S][N]との文字が刻まれています。それぞれスペイン語で「東」「西」「南」「北」の頭文字なんですね。

[E]（東）[O]（西）面にあたるコンクリートの地面の真ん中には、幅10cmほどの1本の線がはるか遠く東西に伸びていました。これこそまさに「地球を南北に二分する」という“赤道”なのです。

でも冗談ながら、色は何もついていませんでした。赤色でもなく、地面の汚れと土ぼ

こりではそれは黒色に近くなっていました。私は先に友人から聞いていた指示を思い出し、その線を両足でまたぐと、持っていたカメラを同行の友人に渡し、ポーズをとったんです。友人は破顔一笑。「セニョール・シミズ！とうとう地球をまたぎましたネ」——と。この瞬間、私は地球の南北両半球に足をかけたことになるのだというんです。

たいそうなユーモアですが、言われてみるとついそんな気になってしまうから面白いですねえ。これも冗談ながら、またいだ両足も股も、熱さでヤケドをするようなことはありませんでした。

周囲の気温は暑さとは程遠く、摂氏10度前後で肌寒いほど。キトが海拔2800mの高地にあるからです。ここから西に1000キロ行くと、同じエクアドル領のガラパゴス諸島。ここは太平洋の赤道直下で、1年中30度前後の熱帯です。

この赤道の下半分、南半球では四季も反対になります。日本は今、冬から春に向かうところですが、南米のブラジルやアルゼンチンでは、夏から秋に向かっているところですね。

その3

「五つの『あ』の原則」

ところで、これだけ交通や通信の手段が発達しても、それぞれの国の人々の生き方や生活慣習はそんなに変わるものではありません。

新幹線が10分か15分おきに正確にピタリと発着する。都内の通勤電車も2～3分おきに入ってくる。少しでも遅れると皆イライラし出すという日本です。

それに比べ、私の駐在していたパナマではそうした問題はありませんでした。それは電車がなかったからです。小さな国なので近場へは自動車かバスで、国外へは飛行機が一般的でした。分、秒を争う時間正確な日本の競争社会から、何事においてもゆったりしたリズムのラテン・アメリカ（中南米）に赴任したばかり、ずいぶんイライラしたものでした。

向こうは何事も「アスタ・マニャーナ」でよいのです。これはスペイン語で「あしたまた」という意味ですが、5時または6時になると、仕事が途中でも、店にお客さんがいても「アスタ・マニャーナ」で帰ってしまう。仕事の約束の期限が守られなくても「アスタ・マニャーナ」。それよりも自分の生活を大切にしているんですね。

パナマでも、夜遅くまでオフィスに電気のついているのは、大部分が日系の駐在企業でした。もっとも、先ほど申し上げた時差の関係、ということもあり得ます。パナマと日本の時差は14時間。東京本社が昼間の時間に、上司と連絡を取るためには、向こうは夜の時間に電話をしなければならないわけです。

ところがパナマ人は、社員のみならず役員も、官庁の局長クラスの幹部職員も、定時には殆ど帰ってしまっているのです。

私も、「これこれ、しかじかの取材をいつまでに」との指示を東京本社から受け、一生懸命取り組むのですが、なにせ相手のあることです。はかどらない交渉と仕事にとうとう「五つの『あ』の原則」を編み上げたのです。

<ボードへ転記>

「あせらず」「あわてず」「あくせくせず」「あてにせず」そして「決してあきらめず」――。

この「五つの『あ』の原則」を心にとどめている限り、それほどイライラすることもなくなってきたわけです。海外ではまさに“郷に入ったら郷に従え”が大事なんですね。

その4

「日本に行ったら日本人だらけだった！」

もう一つの大きな特徴は人種の混交です。

よく、ニューヨークは“人種の坩堝（るつぼ）”と言われていますが、首都のパナマシティも同じです。ある時、日本での研修会に参加したパナマ人が帰国するなり言ってきました。

「S r シミズ (M r シミズ)、日本での研修会は素晴らしかった。大勢の仲間にも会うことができ、あのシンカンセンにも乗ることができた。日本人は本当に親切で感激しました。充実した日本滞在だった。でも、とつても驚いたことが一つあったんですよ。それは、日本に行ったら日本人だらけですネ」と。

先住民のインディオ（インディアン）と、新大陸の発見以来、ヨーロッパからやってきた白人、それにパナマ運河の建設時に労働者として入った黒人や中国人。その子孫。そしてその混血。またその混血……。極端な言い方をすれば、100 人集まれば、100 人の肌の色が違うパナマからすれば、彼の発言もうなずけるような気がします。

もっとも、日本も近年は、いろんな国の人々が東京にまた地方にも住むようになり、状況はかなり変わりつつありますが・・・・・・。

その5

世界で語られている日本人のジョーク

こうして海に囲まれた、世界の中でも特異な存在である日本と日本人についてこんな小咄も流布しています。

ここでまた質問です。

「ある日、大洋を航海していた船が事故で沈没してしまいました。海に放り出された乗客は、遠くに見える島に向かって泳ぎだしました。その中のたった3 人だけ、この小さな島に泳ぎ着くことができた。若い男2 人と女1 人でした。さて、この男2 人は女1 人をめぐってどんな行動をとったのでしょうか？」

答えは次の通りです。

フランス人：1 人は彼女の夫に、もう1 人は彼女の愛人になりました（フランスでは大統領でさえもこうしたケースはありますね）。

イギリス人：なんと2 人は、彼女を放っておいて、自分たち2 人で愛し合い始めたのです。

イタリア人：2 人は彼女を自分が手に入れようと、決闘を始めました。

では日本人はどうしたのでしょうか？

日本人：2人は、島のどこかに電話がないかとあわてて探しに出かけました。本社に電話して、上司の指示を仰ごうとしたのです。

——この小咄、日本人の行動形態の特徴をよく表わしていると思いますよね。

もう一つ、同じようなよく知られたタイタニックのジョークがあります。多分、この会場にも知っていらっしゃる方もいるかと思いますが・・・。

<ジェスチャー大きく>

「いよいよ沈没しかけた船から、男も女も我先にと救命ボートへ避難しようとした。大混乱になろうとしている現場で、婦人子供を優先させようとして船長が説得を試みまず」

まずアメリカ人男性に：「キミはヒーローになりたくないか！」(解説)

イギリス人男性に：「あなたは模範的なジェントルマンだ！」(〃)

ドイツ人男性には：「君の国の法律ではそうなっているよ」(〃)

そして日本人男性には：「皆がそうするからあなたもそうした方がいいと思いますよ」

このように、日本人は、まず周りに合わせようとするんですね。周囲の目を気にし、突出することを恐れ、横並びを好み、他人のするように自分もする、という傾向を持っている。日本人は、他人の目を気にしすぎるように思いますね。

陽気で激しいリズムのサンバ 人生の哀歓がにじむタンゴ

さて、ラテン・アメリカの音楽を代表するものにサンバとタンゴがあります。名前の語呂(語数)は共に3字で似ていますが、内容は対照的です。前者がブラジル——特にリオデジャネイロを中心——に歌い踊られているのに対し、後者はアルゼンチンの首都ブエノスアイレスのボカの街で生まれ育ちました。

人工の近代都市ブラジリアがブラジルの大草原の真中にこつ然と誕生するまで、同国の首都は大西洋岸のリオデジャネイロでした。人々は略して「リオ」といいます。このリオが世界の観光客とマスコミの注目を集めるのが2月のカーニバルですね。この時期になると、店も工場も官庁も閉まり、人々は数日間にわたって、日本の阿波踊りよろしくサンバのリズムに乗って踊りまくるのです。

アフリカ音楽の伝統が北アメリカの機械文明のなかで育ったのがジャズ、そしてポルトガル文化と混交したのがサンバ。したがって、このカーニバルの主役は黒人が多いですね。彼らはこの日のために1年がかりで蓄えたお金を仮装パレードや服飾費に投ずるのです。そして日ごろの欲求不満を踊りのなかで解消するとも言われています。

でも、サンバは今、黒人だけのものからブラジル人全体のものとなりました。ブラジルの各地にサンバの教習所があり、国際的な文化祭などでも、ブラジルを代表する民族舞踊として海外でも演じられておりますよね。

はじけるようなリズム、動きの激しい踊りのサンバとは対照的に、タンゴは一般に静かなメロディーでどことなく感傷的です。タンゴは後ろ向きの歌だと言う人もいます。夕

暮れのパンパの草原で、一人でタンゴを口ずさんでいると、人生の哀歓がにじみ出てくるかもしれません。

1世紀以上も前に、ブエノスアイレスの下町ボカから自然発生的に現れてきたタンゴは、生い立ちも不詳なのが実情です。そのボカを訪れ、また一夜『ミケランジェロ』という名前の小劇場で“本場”のタンゴをじかに見、聴く機会がありました。ボカはうらさびれた感じの港町となり、劇場内の座席の大部分は観光客と年配者で占められ、若者の姿はあまり見受けられませんでした。

かつて、いつラジオのどのチャンネルを回しても、タンゴが流れていたものですが、今はその局も放送時間も少なくなっている。オールドファンだと言う中年の紳士は嘆きながら語っていました。

「ええ、どんな時代でも根強いタンゴのファンはおりますよ。しかし残念ですがここのタンゴは時代から取り残されつつあります。今の若者が好む激しいリズムに合わないのですね。タンゴの演奏家、舞踏家の収入も少なく生活は厳しい。政府もその保護に力を入れていますが、大衆と時代の心がついていけないのですよ」

一般に、タンゴはサンバより日本人向きであろうと私は思います。踊りまくるサンバより、人生の思いにふけられるタンゴの方を日本人は好むからです。でもそのタンゴが本場で衰退とはいかぬまでも、聴かれる度数が減ってきている。文化また音楽も時代の反映。“時と共に去りぬ”タンゴか。いや、ひょっとすると愛好者の多い日本が本場のタンゴを継承することになるのかもしれませんが！

スポーツ

フットボールへの熱狂ぶりと野球との対比

ラテン・アメリカの人気スポーツはフットボール(サッカー)ですね。<以下、ここでは日本の皆さんの感覚にあわせて「サッカー」でいきます>。サッカー王国ブラジル最大の競技場は20万人を収容し、かのペレ選手にみるように、プロの一流選手は国民的英雄となっています。名門出身でなくても、学歴はなくても、体一つと才能さえあれば“一旗あげる”ことができるからです。

サッカー場はいたるところにあり、広場がすぐアマチュアのサッカー練習場に変身する。まだお尻からオムツのとれない赤子がサッカーボールを相手に遊び戯れるという土地柄なのでですね。

——アルゼンチンで車でパンパへ取材の途中でした。ブエノスアイレス市内の街路を延々と流れていく市民の群れにぶつかりました。私が質問をしようとする前に、それを悟った運転兼案内のアルゼンチン人のL君は言葉をはさんだのです。

「サッカーですよ。サッカー、サッカー」

この日のカードはアルゼンチンでも最強の2チーム「リベルプラテ」と「ボカ」の対決だといえます。競技場に向かう人波でした。その熱狂ぶりは、さらに競技場外のパンパへの途中で見せつけられるハメとなったのです。

市内の混雑を抜けたところでガソリンスタンドへ寄りました。カーラジオによると、ま

もなく試合が始まろうとする時間でした。給油スタンドには誰もいません。クラクションを鳴らすと奥から給油マンが、せっかくのラジオ中継を邪魔されて迷惑そうな顔をして出てきました。そしてL君に向かうと重々しく口を開いたのです。

「キミは一体どっちかネ」

L君は間髪を入れず答えました。

「もちろん、リベルプラテさ」

と、とたんに手の甲を返したように給油マンの愛想が変わったのです。

「何リッターにするの？」

給油の間、彼ら二人はもう年来の同志の風情でしきりに試合の予測を交わしていました。共に同一チーム「リベルプラテ」のファンだったのです。再びハンドルを握るとL君が口を開きました。

「たまたま私が彼と同じチーム支持でよかった。もし『反対』だったらガソリンは一滴だっでもらえなかった。時間もすべり込みセーフ。試合が始まれば客があっても店は閉めてしまうからネ」

彼は引き続き説明を加えていきます。試合終了と同時に市内のいたるところでクラクションを鳴らした車が走り回る。勝ったチームのファンたちです。

これほどラテン・アメリカの市民を熱狂させるサッカーに端を発して、国家間の紛争さえ起こした歴史もあります。中米のホンジュラスとエルサルバドル。お隣同士のこの2国は、サッカー試合の勝敗の不満が因となって戦争に近い状態にまでなったのです。

この30年来、日本のサッカー熱も盛り上がってきていますが、もう一つの代表的スポーツの野球と比べると面白い現象がわかってきます。野球の応援はサッカーほどに情熱的ではありませんね（阪神タイガースの応援団を除いて）。それは、攻守交代また投球ごとに間をおく野球と、走り出したら止まることのないスピード感あふれるサッカーとの違いからくるものなのでしょうが、もう一面で民族自体に流れる血の違いからきているような気がします。

日本人の国際性は？

ここで日本人の国際性に関してメキシコで見た、少々残念な光景をご紹介します。

夕方のメキシコ・シティのレストランでのことでした。50席以上を収容の広い部屋の一角では、テーブルをつなぎ合わせ15人ほどの日本人観光客が座っていました。すべて男性です。

どうも昼間は名勝のテオティワカンのピラミッド史跡と舟遊びで有名なソチミルコを訪れたようです。やや興奮気味でその印象を語り合っていました。お土産用のソンプレロ（つばの広いメキシコ独特の帽子）がテーブルの片隅に山と積まれています。

と、一人が手を挙げ、大声でウェイトレスを呼んだのです。

「ネーチャン！」

はっきりとした、しかもやや卑俗な印象を与える日本語です。近づいてきたウェイトレスに今度はこのグループの通訳らしい別の男性がスペイン語で勢いよくまくしたてたのです。

「一体どのくらい待たせるんかね。もう注文してから30分もたつんだけどサ！」

周囲が再びこれに雷同して、日本語でガヤガヤ騒ぎ始めました。ウェイトレスはその日本語が感覚的にわかったかどうか、スペイン語で先の男性に何かを説明すると奥に消えていきました。

ようやく料理が出てきました。テキーラも十分にまわったらしく、興に乗ったそのグループは、今度は大声で日本の歌をうたい始めました。レストラン内には家族連れのメキシコ人、またアメリカやヨーロッパから訪れた夫婦連れの観光客が静かに懇談しながら食事をしています。なかには、明らかにイライラを抑えている感じの客もいました。

たぶんテキーラの程よいまわりが、旅の開放感に拍車をかけているのでしょう。あるいは異国での新体験の連続に感激し、その一方でホームシック的な心情が日本の歌を高吟させたのかもしれませんが。でもこれが仮に一人だったらこうした光景は決して起こらなかったでしょう。元来が外では引っ込み思案の傾向が強い日本人のことです。ただそれが団体となったとき「ミンナデスレバ、コワクナイ」心理が働いてくるのです。そこには日本人特有の群れ歩きや、自主性のなさが反映しているともいえます。

まして男性のみという欧米の感覚からしたら、やや異常な旅行団の性格も原因となっていたのでしょう。そもそもラテン・アメリカを訪れたら、ラテン・アメリカの風習を尊重するのが自然の姿でしょう。“郷に入ったら郷に従え”。「アスタ・マニャーナ（明日また）」のリズムの国で、注文の品がまだ来ない、とセカセカする方のギアの回転を調整しなくてはいけない。ここでは、時間をかけてゆっくりと食事時の懇談を楽しむのが本来の姿なのです。

ところが、大型ジェット機のごう音とともに、元気いっぱい“効率の国”から着いた日本人は、寸分を惜しんで疾風の如く観光地を駆け抜け、カメラのシャッターを押しまくっていく。そして札びらを切って観光地の土産品を買い占めていくのです。しかも経済的な優越感が、ときに現地の人々の眉をしかめさせる言動へとつながったりします。もともとが親日的なメキシコのこと。ひょっとしたらあのレストランの中には日本語を理解するメキシコ人もいたかもしれません。となれば、ウェイトレスの心の奥まで思いやれる人間性が欲しかった。日本から一歩足を踏み出したら、実はこちらが“外国人”なのです。ちょうど日本国内で、ガイジンまたはガイジン観光団をしげしげと見つめるように、国外での言動のすべてが“日本人は・・・”と現地の人々の目に映っていることをまずは銘記することが大事だと思うのです。

機中で“黄色人種”として差別される

“名誉白人”として遇される日本人

寝ている間に仕事が進む「魔法のマクラ」

第1部のラテン・アメリカの話の最後に、いまでも海外の現地とつながっている私のパソコン生活の最前線のエピソードをご紹介します。

ちょうど10年前にホームページを立ち上げました。すると、知り合いの外国人の友人から、「自分たちも書かれているものを読みたい」との希望が寄せられてきたのです。そこで、それぞれの言語圏や文化にも共通し、興味深く読まれそうなテーマに絞って自分で翻訳を始めました。

でも、正しい翻訳のためは第三者のチェックが必要です。そしてチェックはネイティブが理想なのです。私も国内に多くの外国人の友人がおりますが、それぞれ忙しくてチェックを頼むのには気が引けます。プロに頼めば相当額のチェック料金を取られるでしょう。

そうこうしているなか、なんと「記事を読みたい」と言った海外の友人自身が翻訳のチェックを申し出てくれたのです。英語はアメリカに住むKさん、スペイン語はパナマに住むMさんでした。Kさんは横田基地で知り合った元米軍将校、Mさんは私がパナマ特派員だった当時の友人で、元獣医。

彼らの申し出に心から感謝しているところですが、これをもう一步広げて考えていくと、なあんだ、アメリカでもパナマでも、そこに住んでいる人はいわば誰でもが、つまり100パーセント近くがネイティブであるというわけです。

こうして、翻訳した原稿を夜、メールに添付して送っておくと、最初に述べました時差の関係で向こうは昼間。早いときには翌朝には私のパソコンにチェックされた原稿が戻っています。つまり、こちらが寝ている間に仕事は進んでいるのです。

「フラット化する世界」(トーマス・フリードマン著)との本がベストセラーになりました。そこでは、パソコンによる一つの仕事を、インターネットを使いアメリカからインドへ送る、今度はインドからイギリスへ、そしてまたイギリスからアメリカへと地球の昼時間を追っかけてその仕事が継続され進んでいる、つまりそれぞれの国の労働者は仕事が終わって眠っていても、リレーされたその作業は24時間どこかの国で続いていると述べています。

40年前、私が特派員としてパナマに赴任したころは、メールはおろかファクスさえありませんでした。テレックスでローマ字を打ちながらの交信でした。すごい時代に入ったものですね！いみじくも友人が言ったものです。

「あんたはいいね。“魔法のマクラ”を持っている。自分がよだれをたらし、いびきをかいて寝ている間に仕事をやってくれるという魔法のマクラをさ！」

第2部 スペイン定年留学、ヨーロッパ文学紀行での体験から

高校時代からの夢を実現

ラテン・アメリカに10年間駐在、各国を訪ねて感じたこと、それは、これらの地の文化の原点はすべてスペインにある、ということでした。1492年、コロンブスが新大陸に到着して以来カトリックを軸にしたヨーロッパ文化が入っていったのです。そこで、私はいつかはスペインに行き、その原点を探りたい、特にその文学の原点ともいべき「ドン・キ

ホーテ」を究めてみたい、との夢を抱いていました。

2001年に定年となった私はその夢を実現することができ、スペインの地中海岸コスタ・デル・ソル(太陽海岸)にあるマラガ大学に留学しました。

もう50年以上も前、私の高校時代には、留学なんて夢のまた夢、都会の超優秀生がフルブライト奨学金を利用した留学ができる、といった話を聞いたのみでした。1ドル360円。それも自由に外貨が手に入らない時代でした。あれから日本と世界の環境は変わり、今は1ドル110円前後。“国際化”の波に乗って、誰でも海外に行ける時代です。

留学——こんなよいものは若者だけに許しておくことはないでしょう。これまで家族を支えるために必死で働いてきた父親族も、少し人生を振り返る余裕のできた定年後に、若い時代にできなかった夢を実現しようと考えても責められる理由はないだろう、ということで、第二の人生を歩み始めたのでした。

担当教師をファーストネームで呼ぶ

そこで、留学したマラガ大学で体験・見聞をしたエピソードのいくつかをご紹介しますと思います。

私が留学していたクラスには多彩な民族、国籍、年齢の学生が集っていました。スウェーデン、ノルウェー、デンマークといった北欧の国、ドイツ、イギリス、フランス、エストニアなどのヨーロッパの国々を中心に、アメリカ、アジアの国々、それにアフリカからも来ていました。その仲間たちが教室ではすべてファーストネームで呼び合います。教師もクラスメートもみんなこの歳をとった私のことを「タケシ」と呼ぶのです。教師に対し、自分たち生徒も「ラウラ」（文法担当）、「ラファエル」（会話担当）とファーストネームで呼んだものです。

英語圏でもこの傾向はほぼ同じですが、スペイン語自体の構造からも文化の違いが浮き彫りになっていますね。スペイン語は動詞の変化が難しいですが、日本人にとって発音は英語などよりも易しいです。「アエイオウ」の母音が同じだからです。

その一方で、日本語はマスターするのに大変に難しい言語だと思いますね。理由の一つは文字。ご存知のように日本語の文字には3種類ありますね。ひらがな、カタカナ、漢字です。ひらがな、カタカナともに48字ですが、漢字となると、ふつうに社会生活をするために知っておく文字は2000字近くになります。外国人がこれらの文字を記憶するには、大変な努力と時間が必要なのです。（「日本人だっておんなじだ！！」と言う方もいるかもしれませんね）

以下はマラガ大学のクラスで私が日本語について研究発表した一部です。

まず、日本語では自分自身を表現するのにも、10近くの言い方があります。（黒板に書く → 参加者に他の例を聞く）

私（わたくし）、私（わたし）、僕、俺、我、内（うち）、手前、小生、等々。

「わたくし」はより丁寧で上質の表現です。「わたし」は比較的丁寧な表現で、最も一般的に使われていますね。

「僕」「俺」「我」とも男性が使用。このうち「僕」はより口語的で、「俺」はやや丁寧

さを欠き、「我」はやや古い表現です。「内」は両性によって使われます。「手前」はへりくだった古い表現。「小生」は主に手紙や書き物の中で、やはり、へりくだった表現として使われますね。日本の社会で大切なのは「謙譲」の心です。これをわきまえないと、まわりから「あいつは傲慢だ。頭が高い」と言われかねないのです。

スペイン語では、自分を表現する言葉は「Yo」の一つだけです。英語でも同じ「I」だけです。もちろん、動詞の使い方によって、丁寧の度合いを変えていくことがあります。でも、日本語の尊敬語、丁寧語、謙譲語ほどの複雑さではないと思います。

侃々諤々（かんかんがくがく）の意見が続出

しぐさについては面白い発言が飛び出しました。

——突然、くしゃみが出そうになった。そのとき、どうするか？

スペイン人は両手を口元にもっていく。もちろん、他人に飛ばないようにとの心遣いで。スウェーデンからの学生は「我々は、腕の肩に近い部分をすぐに口元に持っていくよ。だって、手は他人と握手をする。相手に対しても汚いではないか」と。

くしゃみが出ると、たいがい、周りのだれかが「ヘスス（イエス・キリストの意）」とか「サルー（健康の意）」といった声をかけます。「神のご加護を」とか「お大事に」という意味ですね。英語でも”(God) bless you! “なんて言っていますね。

欧米人、またラテン・アメリカの人に多い抱擁とキスについては、そのやり方について、侃々諤々（かんかんがくがく）の意見が続出しました。「そういえば、男同士キスする国も結構あるじゃないか。よくテレビで政治家同士がやっているのを見るし」なんて。

とどめの質問（というよりも、驚きの感嘆符）は「ええ！ じゃあ、日本では親子の間でもキスをしないの?!」でした。

クラス仲間を我が家に招待

9月末、夏季コースの最終日。授業の終了後、大学近くのカフェテリアで茶話会が持たれました。このコースを最後に母国に帰る受講生が何人かいたからです。話題が日本食談義まで広がっているうちに、いつの間にか、みんなを我が家に招待、日本食を食べさせてあげる方向へと展開していました。

私にとって彼（女）らは、年齢的に自分の息子や娘のようなものです。わが娘も、かつてメキシコのグアナファト大学に留学したことがある。そのときに周囲のいろんな人に、何かとお世話になったかもしれない。そういえば、遠く母国を離れて学ぶ彼らに、若干でも激励になれば、恩返しというほどの大げさなものではないけれど、地球上のどこにあっても“お互いさま”じゃないかとの思いもあったからです。

それに、私は定年になってからすぐにクッキングスクールに1年間通っていました。そこで十八番となっている中華料理を2品、妻は鳥のから揚げ等の洋食2品、それに、みんなが食べてみたい、と言っていた握りずしを用意しました。

幸いにスペインは良質なマグロを日本にも輸出している国です。スーパーでもときどきスペインマグロが見られますよね。でも値段が結構高い。ところが現地では、近くのスーパーですばらしいマグロのトロが日本の3分の1ほどの値段で安く手に入ったのです。

美人女子大生とのキスと抱擁！

昼食時間はスペインタイムの午後2時に合わせてあります<時間の解説>。準備がほぼできたところへアパートの玄関のベルが鳴りました。私はあわてて、スリッパをやや厚底の靴に履き替えました。小柄な自分が、背の高い彼らに少しでも合わせようとの心と、靴で入ってくる彼らが遠慮しなくていいように、同じものを部屋で履いている必要があったからです。

8人がぞろぞろと我が家に入ってきました。

「ムイ ビエンベニード！ Welcome（ようこそ！）」

私はエプロンを脱いで、玄関に立ち、女性とは一人ひとり両頬にキスし、男性とは力強い握手で来宅を歓迎しました。学校内では、恋人同士でもなければキスすることはありません。でも、スペインで学校をはなれたとき、親しい間柄での最大の歓迎の意を表すのはやはりキスなのです。

キスといっても、唇ではなく、軽く抱き合い両頬を触れ合うだけのもの。これをしないと却って歓迎の意が弱く、堅苦しい雰囲気になるからなのです。

とはいえ、金髪の美人女子大生とのキスは、瞬間的でも心をときめかすものがあります。妻も同じように全員と、しかも男子学生ともキスしているわけだから、こちら問題ありません。還暦を超えて、若い外国人女性と頬を触れ合わせられるのも、スペインという文化風土にいるからこそ、といえるのかもしれない。

観光地ではとりわけ用心を！

これも文化比較の一端に通ずる意味から、ここでスペインの安全情報について一つのエピソードをご報告します。少し極端な例かもしれませんが・・・

首都マドリードから近郊線で南に行くと約1時間半でトレドに着きます。スペインの代表的観光地として知られるこのトレドは、古い首都でキリスト教、イスラム教、ユダヤ教の三つの文化が混在、1500年以上の歴史があります。奥州の伊達政宗に派遣された支倉常長の一行も、このトレドを通過してマドリードに入っています。

トレド駅から街の中心に向かって妻と一緒に長さ80メートルほどの橋を渡っていると、向こうから1人の青年がやってきました。カメラを構え、自分が橋の上のどこに立ったら丘の上の旧都をバックにより写真が撮れるかと、場所を探しているようでした。そして、こちらが行き過ぎようとする、とっさに声をかけてきたのです。

「スママセン、シャッターを押してくれませんか？」

観光地です。誰でも、どこでも写真を撮ります。それに協力するのは当たり前、お互いさまのことでしょう。

「OK」。私はこころよく引き受けました。そして彼の指示に従って、カメラを向けたのです。でも、バックがぴたりと決まっていません。そこで私は「もう少し左に移動した方がバックがきれいに入りますよ」と声をかけました。彼は少しの動きを見せましたが「いい、いい、そのままでもいいから」と、特に気にする様子もありませんでした。

撮影したカメラを彼に戻し、再び目的地に向かおうとしました。

と、突然、私たちの前に2人の男が現れて立ちふさがったのです。そして、ポケットから身分証明書のようなものをおもむろに取り出すと、少女の威厳を込めて言ったのです。

「警察のものだけど、身分証明書、パスポートを見せてください」

スペイン警察の制服は着ていません。もしかしたら、私服警官かもしれない。でもその瞬間、私の脳裏にひらめいたものがありました。

「きっと、これは偽警官だ！」

妻もそれを察したらしく、「行きましょう、行きましょう。かまわずどんどん行きましょう」と、私の手を引っ張りました。私たちは駆け足で50メートルほど離れたところまで来て、追いかけているかどうか気になり、後ろを振り向きました。すると、3人はその場でまだたずんでいたのです。

間違いなく、これは強盗未遂でした。しかも、警察官に名を借りた！ 今思えば、あの写真のバックは何でもいいわけであり、まして、カメラにはフィルムさえ入っていなかったのではないか！ と思うのです（当時はまだフィルムカメラが主流でした）。

聞くところによれば、日本人のパスポートは高額な値段で取引されているといます。そうした情報を事前に聞いていたので、外に出るときは、いつもパスポートのコピーだけを持ち歩くようにしていました<海外旅行のアドバイス>。ですから仮にやられても、その面の被害はなかったのですが、持ち金すべてを掠め取られたであろうことは間違いありません。運悪ければ、命に及ぶ危害まで加えられて……。スペインに来て初めて遭遇しかけた危険ではありました。

「カルメン」の舞台を訪ねてみたが・・・

次はセビリアでの話です。セビリアといえば闘牛、フラメンコの本場のほか小説「セビリアの理髪師」や「カルメン」の舞台です。純情な青年が情熱の女カルメンに翻弄され、闘牛士や彼女の情夫、果ては彼女まで殺してしまう悲しい物語です。

誰の心の奥にも潜んでいる感情、本能を、ホセとカルメンの言葉と行動を通して吐き出させています。そこで舞台となった、今はセビリア大学になっているタバコ工場を訪ね、事務所の女性に、ホセとカルメンの最初の出会いの場所を尋ねてみました。

ところが――。

「エッ！ そんな話聞いたことがありませんわ」。

「ホラ、『タバコ工場 の入り口で・・・』なんて物語には書いてあるんですけど・・・」

「じゃあ、きっとこの大学の正門のところかしら」

日本では人気のある小説も、地元では意外にこんなものかもしれません。いや、作者のメリメがフランス人であることから、関心が薄いのもかもしれません。あの名著「ドン・キホーテ」も、前・後編を完全に読み通したことがあるスペイン人々もそんなにいないといえます。

ひるがえって、「源氏物語」を読み通した日本人もそんないないところからして、そんなものかもしれませんよね。

「ハボン」の姓を持つスペイン人

ところでセビリアの近郊都市・コリア・デル・リオに「ハボン」の姓を持つスペイン人が600人余りいると聞きました。約400年前、支倉常長の使節がここに寄港してしばらく滞在。その後、何人かが居残ったところから現在の状態につながったといわれています。

9月の土曜日。セビリア市内からタクシー20分でコリア・デル・リオ市の公園にある銅像の前に立ちました。銅像は台座と合わせて高さ5メートルほど。2本の刀を腰に、支倉常長がグアダルキビル川に向かってきりりと顔を引き締めていました。台座にはスペイン語と日本語で、そのいきさつが彫り刻まれていました。

<日本語の文言>

——この銅像は、当地に上陸した仙台藩士支倉常長一行の偉業をたたえるとともに、1991年に実施した「第2回みやぎ創造の翼」の青年団員と貴市市民との交流の記念として、親愛なるコリア・デル・リオ市民に日本国宮城県が贈呈するものです。

使節一行は、1613年10月28日仙台藩主伊達政宗の命を受け、仙台領月の浦（宮城県石巻市）を出航、イスパニア国王に交易を求める政宗の書状を携え、1614年10月12日当地に上陸したものです。

1992年6月

寄贈 宮城県知事 本間俊太郎

制作 佐藤忠良

スペイン語の文言は、基本的に内容は同じでしたが、これより詳しく長くなっていました。その部分を付け加えると、当時の状況がよりわかってきます。

<日本語にない部分の概訳>

——使節はメキシコに寄り、スペインの沿海を通り当地に寄港、この村の人々の熱い歓迎を受けた。10月23日、セビリア市に到着。スペイン国王に書状を献呈後、フランスを通過しローマに向かった。そこで1615年11月3日、パウロ5世に謁見。その後、セビリアに戻り滞在、1617年7月4日、日本への帰国の途についた。

日本語とスペイン語の文言の間には、一行の往復の航路を示す世界地図および日本近海と地中海の拡大図が描かれていました。「エル・パイス」記事によれば、支倉の帰国に際し、10人以上が乗船せず、そのまま残った。そこから「ハボン」との姓が誕生したものだといえます。

日本とイベリア半島との交流といえば16世紀から始まっていますよね。室町時代の1543年、3人のポルトガル人が種子島に漂着し鉄砲を伝来。1549年には、スペイン人のフランシスコ・ザビエルがキリスト教の布教のために来日しています。

ワールドカップの感想あれこれ

先ほど中南米でのサッカーへの熱狂ぶりを伝えましたが、スペインもヨーロッパで強豪のチームです。そんな一面や休暇に対する姿勢がアルハンブラ宮殿の見学を終えたレストランで目につきました。私のテーブルの仲間は、ベルギー、アイルランドからきた夫妻と、スペイン北部のバスク地方からきた母娘、それに妻と私の8人でした。

アルハンブラについての印象交換ほか、雑談に花が咲きました。ベルギーからの40歳前後の男性は、2週間の会社の休みを取ってスペインを旅行中といい、アイルランドの50歳前後の男性は中学校教師で、3ヶ月間の夏休みを利用して自ら研修旅行だと言っていました。「みんな、休みが長く取れていいですねえ。日本では、まとめて休暇を取れるのはせいぜい1週間。学校の教師の夏休みにしても、『自宅研修』という名目がつき、相当に動きが制約されるんですよ」と私。

「そう、ブリュッセルにも大勢の日本人観光客がやっています。でもみんな忙しいみたい。明日はパリ、3日後はローマと、ヨーロッパを駆け回っているみたいだね」とベルギーからの男性。

「それは、なかなか休みが取れないなか、お金のことも考えて、短期間にできるだけ効率的に各地を回ろうとする面を反映した、やむを得ない動きなんですよ」と私。

「そうそう、効率的というと、今回の日本のワールドカップ(2002年)の運営は素晴らしかったね。あそこにその『効率的』ってヤツが出ているのかもしれないね。スタジアムの素晴らしさといい、テレビ中継の技術といい、非の打ち所がない。日本は本当によくやった」

「日本チームも予想以上の大健闘。日本のフットボール(サッカー)も、格段にうまくなってきているよね」

「韓国との2カ国共催というのも成功したね。今後にいい例を残してくれた」(こんなときもあったのに現在の両国間の関係をみると残念ですよ)

「ウン、いつかアイルランドとスコットランドで共催する、なんてことを考えても面白いよね」

「ええ、スペインも前評判は高かった。審判の難しい判定もあって敗退してしまったけれど、よくやったと思うワ」

ベルギーは日本と初戦で対戦。アイルランドも強国としての印象を残しています。スペインは地元韓国との対戦で惜敗しました。ワールドカップの余韻がまだ残っている中で、たまたま出場4カ国の“外野応援団”がアルハンブラの地で、スタジアムならぬ直径2メートルほどの丸テーブルに会したのも面白い。世界は本当に狭いのです。

文学紀行のエピソードから

ここでスペインからヨーロッパ全体に少し目を広げてみましょう。世界文学紀行の第一作目はセルバンテスの『ドン・キホーテ』でした。以後、『風と共に去りぬ』(アメリカ)『赤毛のアン』(カナダ)『ロミオとジュリエット』『ベニスの商人』(イタリア)『ハムレット』(デンマーク)『ファースト』『車輪の下』(ドイツ)、アンデルセン童話、グリム童話(それぞれデンマークとドイツ)、『戦争と平和』『罪と罰』(ロシア)、『レ・ミゼラブル』『三銃士』(フランス)と続いて現在までに15作品にいたっていますが、すべてをご紹介する時間もないので、ちょうど真ん中辺の童話作品と、3年前、出版150周年で訪れたヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』に関係するお話をしましょう。

アンデルセン童話とグリム童話

北欧のデンマークとドイツを訪れた際の話です。ここでやさしい質問から始めてみましょう。

次の10の童話の作者（出典）は誰（何）でしょうか？（黒板に筆記しておく）

赤ずきん 狼と七匹の子ヤギ プレーメンの音楽隊 白雪姫 人魚姫 裸の王様
醜いアヒルの子 マッチ売りの少女 アラジンと魔法のランプ アリとキリギリス

誰でもが聞いたことのある作品ですね。でも、正確に当てるのは意外に難しい。正解が8割以上だとしたら、その人はきっと幼稚園の先生や保育園の保育さんで、一般の市民だったらよほど童話に深い関心を寄せている人でしょう。

正解は、最初の4つがグリム童話、次の4つがアンデルセン童話、そして「アラジンと魔法のランプ」は千一夜物語、「アリとキリギリス」はイソップ童話からなのですね。

童話は文化の違いを超えて、子供たちに夢を贈る世界共通の宝だということがわかりますよね。

「ああ、抱けなかったマドモアゼル！」

ここで話題を幼児から大人向けの少々エッチ（かな？）話しに展開していきます。3年ほど前にイギリス映画「レ・ミゼラブル」が国内の各地で上映されましたね。実は、その3年前の夏、私は『レ・ミゼラブル』と『三銃士』の舞台の取材のためにパリを訪れたのです。以下はその時に綴ったエッセイ（夢物語）です。

パリに到着した最初の日の午後、少し時間があつたのでオペラ座で公演中の舞台を観賞することにしました。劇場はパリのほぼ中心にあります。

急な思い付きだったので予約席券はありません。入り口で自由席券を買うと、空いていると思われる席のところに行きました。思いがけず隣の席には若くて美しいフランス女性が座っています。そこで私は英語で尋ねました。

「お隣に座ってもよろしいですか？」

彼女も私の英語がわかっただけで「ええ、どうぞ」とニコリとうなずきました。（フランスでは意外に英語のできる人が少ない。英語ができてても自国語＜フランス語＞への誇りから話そうとしない人もいる）

親しみを感じた私はこの機会に、これから訪問しようとする二つのフランス人作家の作品の舞台や場所について相談しようと思い話しかけました。「ジャンバルジャンがコゼットの恋人、内戦で傷ついたマリウスを背負って逃げた下水道はどこだったのか」とか聞いたかった。と、彼女は言ったのです。

「もうすぐ幕が開くから時間がありませんね。あなたの訪れようとする作品については私も読んである程度は知っていますから参考になるお話をできるかもしれません。よかったら自宅にいらっしやいませんか。家はここからそんなに遠くありませんから」

“なんとラッキーな！”

私はオペラ座を出ると胸を躍らせながら彼女のあとについていきました。確かに家はすぐ近くでした。瀟洒なマンションの3階でした。「よかったらどうぞ」。部屋に入ると彼女は親切にもワインを差し出してくれたのです。そして言ったのです。

「ゴメンナサイ。少し汗をかいてしまったからちょっとシャワーを浴びさせてね」

そう言うと彼女はバスルームに入っていました。部屋にひとり残った私はワインを口にしながら彼女の出てくるのを待っていました。10分ほどして彼女がバスルームから出てきました。

と、なんとという驚き！！

彼女はうすいピンク色のネグリジェをまとっただけなのです。スレンダーな美しい身体が透き通って見えてきます。私はショックでどこに目をやってよいかわからず、ソファに座ったまま動きがとれずにいました。

と、彼女はぐんぐん私に向かって歩いてくると両手を広げたのです。私をハグしようとしているのです。

「ここで応えなければニッポン男児の名が捨たる」。私は彼女のあまりの美しさに見とれ我を忘れたように立ち上がると、思いっきり彼女を抱きしめようと両手を広げました。ところが・・・

——その瞬間、私は夢から目が覚めたのです。時差で朦朧とした目をこすりながら、ホテルのベッドの上で枕を抱いていたのです。パリと東京には8時間の時差があります。夕方の5時は日本の夜中の1時になっていたのです。

このあと3日間にわたってヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』、そして、アレクサンドル・デュマの『三銃士』の作品に関する各地の舞台を訪ねて回りました。これらの取材の一部は雑誌等にも掲載されましたが、最初に述べた15作品のすべてについて自分のホームページに写真入りでレポートを紹介しています。本日はこれらの文学作品についてお話しする時間ありませんが、ご興味や関心のある方はレジュメにあるホームページのアドレスにアクセスし「名作の舞台を訪ねて」のページをご覧ください。

熟年よ大志を抱け！

世界の文化比較については他にも色々ありますが、時間も迫ってきました。今日ここに参加くださっている皆様は私と同じくらいの年代の方もいらっしゃるようですので、最後に私の定年後の生き方について、もしご参考になればと少しだけお話させていただきます。

まず、「定年後はHaving でなくBeing が大事」だと言われています。財産や貯金を持っていること<Having>も大事ですが、今、何をやっているか<Being>が問題。財布にいくら入っているかが問題ではない。心にどんな夢を描いているかが問題だということです。夢が、志が人を創る。大きな夢と志は大きな人生を創ると言われています。

たまたま、私の場合、現役時代に海外と関係があり、また言葉もなんとかできたことか

ら、やや特殊な恵まれたケースかもしれませんが、お伝えしたいことは、どんな立場、境遇にあり、どんな道を進むにしても、夢を掲げ、それに向かって努力挑戦していけば、どこからか道が開かれてくる、ということなのです。

世界で最長寿国の日本。人生80年から90年の時代です。平均でも定年後まだ20年の人生が前途に横たわっています。

フランスでは「年金生活」という言葉は、晩年と言うよりも第二の人生、といった前向きな意味合いが強いですね。アメリカ人は、第一線を退くと、いよいよこれからの人生を楽しもうとする。だから、服装や化粧も派手になる。

こうした面からいうと、定年は今やゴールではなく、豊かな可能性をはらんだ次の人生のスタートともいえるでしょう。定年からいよいよ黄金の日々が始まるわけです。

札幌農学校校長のクラーク博士は言いました。

Boys, be ambitious! 少年よ大志を抱け!

私はこれをもじって、

Seniors, be ambitious! 熟年よ大志を抱け!

と訴えているところです。

私の大志は、5年後の東京オリンピック・パラリンピックでボランティア通訳として貢献することです。そのため今、英語とスペイン語の再勉強を始めたところです。

よく定年後は「きょういくときょうようが大事である」と言われます。いえ、今さら勉強しなさい、と言っているわけではありません。「きょういくところがあるか」「きょうするべき用事があるか」ということなんですね。確かにその通り。よくぞピッタリの言葉を考え出してくれたものだ、と思います。

やりたいことがあるか、行きたいところがあるか、会いたい人がいるか、(思いを寄せられるような人がいればなお結構ですね)、ときどき点検をしてみるとよいと思います。お金がたくさんあるから充実した生活を送れるのではない。生きる知恵があつてこそ、希望に燃えた楽しい生活を送ることができるわけです。

世界には経済的なものだけでなく、もっとエキサイティングで大事なことがいっぱいあります。

私の好きな小説『ドン・キホーテ』のなかで、従者のサンチョ・パンサが言っています。

<声音で>

「人間、寝てえるうちは、身分の高え者も低い者も、貧乏人も金持ちも、みんなおんなじでさあ」

「この世を捨てて、地の下へもぐる段になったら、お大名も日雇いも、おんなじように窮屈の道を歩くだし、法皇様のからだも給仕係のからだも、よしんば背丈にちがいはあろうと、占める広さには変わりはない」

——たしかに、誰でも寝るときは、あるいは死ぬときは、どんなに頑張ってみても、たまたみ2畳以上を独占することはできないですね。それにどんなにお金や資産をためてい

たとしても、それを死後の世界に持っていくことはできません。

仏典に「蔵の財より身の財、身の財より心の財第一なり」との言葉があります。蔵の財とは、いわゆるお金や資産ですね。身の財とは、地位や名誉、また健康というところでしょう。そして、心の財とは、人間としての生きかた、他人を思いやる心、もっと言えば、それは志ともいえるでしょう。そして、お金や資産、名誉や地位よりも、人間としての心を、生き方を豊かにしていくべきだ、との教えだと思います。

定年後を輝いて生きるために

そして最後に——人生を充実させ、輝かせていくカギは、「ハゲアタマ」にあると思っています。イヤ、私のこの頭のようにする必要はございません。

「定年後を輝いて生きる」ためには、この「はげあたま」、<ボードに転記>、つまり「はつらつ」と「げんきに」「あかるく」「たのしく」そして「まあるく、まえむきに」)生きていくことです。

特にこの最後が大事ですね。人生、すでに甘いも辛いも経験し、角が取れて「まあるく」なってきたはずですから、今さら人間関係でギスギスしてもしょうがない。穏やかに「まあるくまえむきに」行くことです。自分のためだけにキュウキュウしているのではなく、人を助け、人を讃え、人を褒めていくことです。そうすれば自分が助けられ、讃えられ、褒められるようになっていきます。

「人のために灯をともしれば、自分の前も明るくなる」と言われるとおりでしょ。自分が明るく輝いていけば周囲も明るくなっていきます。

いつも感謝と笑顔の習慣を。そこから人生が輝いてきます。つまらない顔をしていると、つまらない人生になってしまいます。生命に弾むような勢いがあれば、必ず人生も躍動してくるでしょう。私はこれからもこの「ハゲアタマ」をモットーに生きていたいと思っています。

今、髪がふさふさの方も、どうぞこのモットー実践だけはお勧めです。人生が明るく楽しくなってきます。残された人生の時間をどんな色に染め上げていくことができるかは、まさに各人の腕の見せ所となってくるのだと思います。

世界の文化比較からシニアの生きがい論へ、そして禿げ頭論へと、話しはあっちこちに飛んでしまいましたが、皆様が何かをお感じになり、今後の人生のヒントとなり、御参考になればこんな嬉しいことはございません。

これをもって私の話は終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

※今日は、時間の都合で中南米でのエピソードが中心だったので、ヨーロッパの面白い話からもう一つ「イタリア最近トイレ事情」のコピーを用意しましたのでお持ちください。